

大阪毎日新聞號外

大正十年七月廿九日

神戸川崎造船職工團 警官隊と大衝突

警官拔刀して遂に流血の慘を 見る——死傷者數十名に達す

廿九日朝神戸川崎造船職工團は生田神社に参拜し、萬餘の群衆は神前に例の警書を朗讀し君ケ代の合唱を済ましたが更に兵庫七宮神社に向はんさす途中、湊町一丁目賀川氏等の先頭をやり過ぎて引返して大部分は川崎造船所の方向へ殺到せんとし多数警官の警戒を突破し電車線路曲り角の川崎造船所へ向はんさす處で職工團と警官隊との衝突を起し遂に流血の慘を見るに至り警官職工團双方に數十名の負傷者を出し職工中には数名の重傷者もあり警官は抜刀し職工側は石を飛ばし洋銃を振廻し大混亂に陥り抜刀せざる警官隊は職工の警部を突刺したるあり目も當てられぬ後、警官の死傷を出した。此日職工團は既に生田神社で氣勢大に昂り水威運動を差止められたるに警官の壓迫に対する反感を高め三宮神社前より元町筋に出て更に市役所前線列前に至るや口々に對馬所に圍撃せる神戸監獄本監未だ監に拘禁中の最高幹部青柳第一郎氏を擁ひ起し大群衆は一聲に労働歌と共に「青柳君救へ」と絶叫し、人々險惡の度を増し更に多量連を置き中町筋に出るとアツクシヨウの職工を擁護したが先頭の賀川氏等が初め幹部の制止も押へられぬ程であつたが遂に湊町一丁目電燈會社前で賀川氏等が川崎造船への通達へ行かうとするのを極力制止し一時やり過ぎたが其中の一團は「川崎へ」「ここ叫ばや大部分は煙を返して遂に前記の慘事を見るに至つた彼等は警官の警を見るに至つてます」と叫び、石を投げ、石や物色し、群衆中に突入したため遂に大混亂を起し同警官は袋叩きとなり同職工を擁護せんせんと飛入りたる二三巡査と職工との間に争鬪起り、服隊が十手を離して突入するに及んで大混亂を起し各所に悲鳴と叫喚を起り職工團の負傷者五十五名、内抜刀で斬られたるもの十数名に達し、巡査も亦十数名の負傷者を出した。職工三名も死の狀態にあるが、死れも附近に收容し手當中であるので職工團は警官隊に返はれ漸く解散した。

大阪毎日新聞發行所 大坂市東區大川町一丁目

11.7.28

國民に代りて労働者諸君に告ぐ

○神戸市に起つた労働争議は、早や三週間を過ぎて、今尚解決が出来ず、三菱は休業を繼續し、川崎は始業はしたものの就業人員は四百人内外で、同盟罷業者の数が遙かに多い、我等は國家産業の爲にも労働者の爲めに深く之れを憂い、且つ悲しむものであります。

○多くの要求條項中團體の交渉權は、最も重大な問題であつて一朝一夕に決せらるべきものでない、先づ法規の制定を政府に迫り、労働組合の公認を得ることが肝要である、退職手當や給料の割増等は根本的問題でなく、資本主と労働者と打解けて協定すれば宜しい、何も僅かな期間を争はればならぬ緊要問題ではありません。

○我等同志は労働者諸君が、生活の不安より起る種々の問題を無理に申すのではないが、我國の經濟界の模様や産業界の現状より冷靜に考へますと、今は労働者の問題を解決するには頗る都合の悪い時機であると思ふ、此點は切にお考へを促すのであります。

○元來同盟罷業は勞資相互の損害なるばかりでなく、我國の産業上の一大損失であります、意氣地の張合でいつまでも相争ふことは何人の利益にもなりませぬ、此際労働者諸君は團圓の事情をも能く考へて、兎に角にも業務に従事して、一方要求の條項は委員を以て交渉を繼續することが、穩當であり且つ利益であると思つてあります。

時事問題、研究者

○更に資本主たる會社側に於ても、労働者の要求を待たず、自から進んで勞資間の圓滿なる協定案を一日も速かに作成されんことを望むものである、我等は煽動的態度を取るものを憎むと共に、眞の労働者の味方となつて徐ろに各種の問題の解決に誠意を以て努力せんことを誓ふものであります。

○我等は勞資問題の眞の解決を一日も速かにするやうに、際市當局に陳情書を提出し更に労働法案の發布を内閣總理大臣及内務大臣へ宛て陳情し、徹然と同案に就て専門家及び學者の批判を求めて諸君の參考に供します。

大正十年七月

公正評論社 吉田 素軒
關西新聞社 横山 素軒
風國雜誌社 池山 素軒
第一新聞社 内本 素軒
編輯 紅雨 素軒
印刷 雨一 素軒